



校長室だより

令和5年度

2月14日

NO. 42

心一つに跳ぶ 冬の風物詩「なわとび集会」

あまり知られていませんが、日本は「なわ跳び大国」と言われています。縄を跳ぶだけの競技ですが奥は深く、何事も研究をして克服のために努力できる日本には、多くのなわ跳びの世界記録があります。多重跳びのギネス記録は、「8重跳び」で、なんと日本の15歳の中学生が達成しています。彼は、5年生までは縄跳びは苦手だったそうですが、面白さに目覚めて練習することで、記録を打ち立てました。大なわ跳びでも、「単ロープを1分間で最多スキップオーバー数」部門、簡単に言うと「8の字跳び」でギネス記録を打ち立てたのは、静岡県富士市の小学生チームで、1分間に230回跳んだそうです。このようになわ跳びには多くの跳び方、遊び方があり、誰もが楽しめるものです。



俳句の「歳時記」で、「縄跳」は冬の季語であるように、学校でもなわ跳びは、冬の風物詩となりました。2月9日には、秦梨小学校でも「なわとび集会」が行われました。これまでに子供たちは、体育の時間だけでなく、寒くても休み時間になると外に出て、ジャンピングボードを使って練習したり、学年関係なくみんなで長なわ跳びの練習をしたりしてきました。なわ跳びは全身運動で、それぞれ個々に合わせた目標設定が可能で、跳べる回数など目標も明確に設定でき、練習して跳べるようになると、達成感も味わえます。

当日、まず、短なわとびの部では、一人一人決められた種目の中から1種目選び、それぞれ目標をもって、1分間に何回跳べるかを測ります。何度も練習した二重跳びに挑戦する子、長くたくさん跳べるように前跳びを選ぶ子、一人一人が自分に合った、そして、今の自分に自信のある種目に挑みました。長く跳び続けるには、技術だけでなく、疲れてきても跳び続ける体力や1回1回を大切に跳ぶ集中力、挑戦する気持ちや諦めない気持ちなど、いろいろな力が必要になります。また、同じ種目を跳ぶ仲間との戦いであるとともに、自分自身のこれまでの記録やその時の気持ちとの戦いにもなります。跳び終わって、笑顔で誇らしげな子、暗くうつむく子、それぞれが自分の目標と向き合い、自分自身のこれまでの頑張りをかみしめます。



「8の字跳び」は仲間との共同活動です。一人一人の縄に入るタイミングや跳ぶタイミングを合わせないと、続けられません。よく「気持ちを合わせて」と言いますが、まさに縄を回す人と跳ぶ人みんなが、お互いのことを考えて、気持ちを合わせることが重要になります。「気持ちを合わせる」ことは、簡単なようで難しいです。けれど子供たちは練習を通して、だんだん早く跳べるようになっていたり、声を合わせたりできるようになっていきます。本番でも、たくさん跳べた喜びは、みんなで頑張れた喜びであり。仲間と気持ちがあつになった喜びでもあります。縄1本で行う「なわ跳び」ですが、秦梨の冬の風物詩でもある「なわ跳び」は、心温かく、心熱くなる、伝統行事でもあります。